

慶應四年戊辰五月朔日

內外新聞

第三

第七日目毎二出板

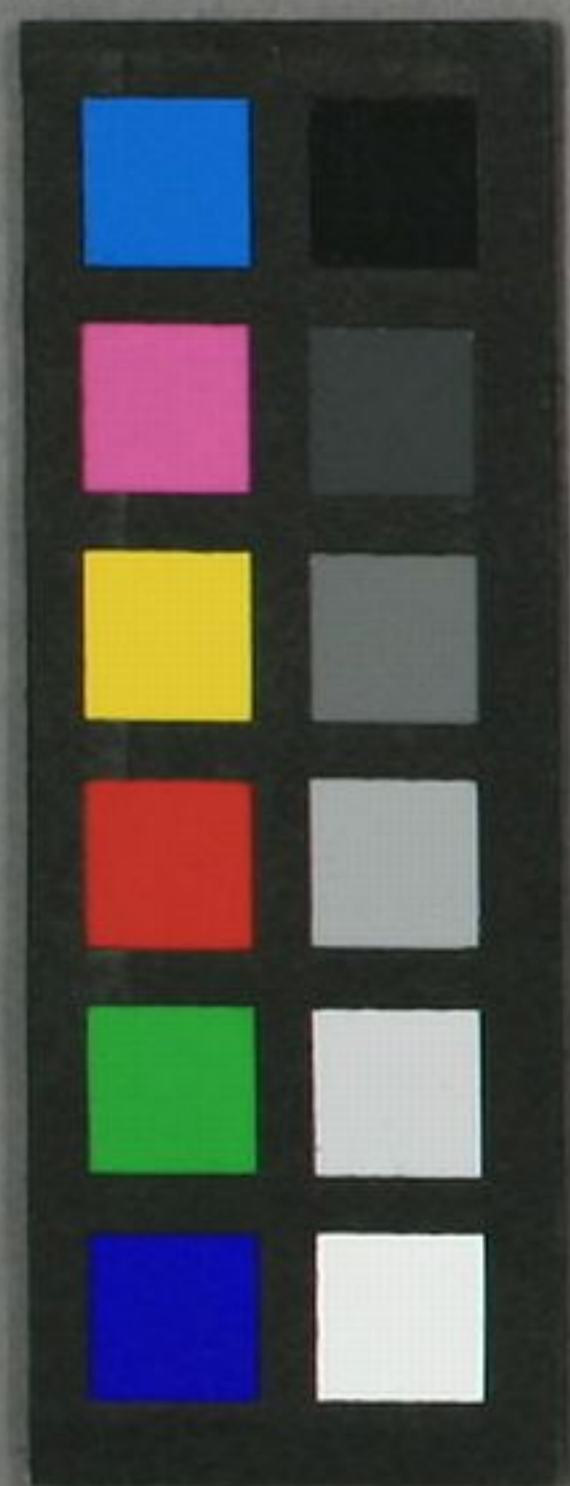
知新館



西垣文庫

文庫 10
7348

3



持 文庫10
7348
3



神戸新聞

第五月廿三日
我五月朔日

今日ハ英國女王ノ誕生日ナリ本國ニ於テハ諸人如何ナ
 ル愉快ヲ盡シテ賀祝スルヤ例年期日ニハ上下一統兒童
 ノ如ク滑稽ケテ之ヲ賀セリ又夕景ニ至レハ老幼ノ別ト
 ク郊外へ出テ快樂ヲ極ムルナルベシト彼是想像セリ
 第千八百卅七年女王即位ノ後ハ能ク民ノ心ヲ取り能ク
 國政ニ心ヲ用ヒラレタリ或日女王自ラセキセコボルク及ヒ
 ゴサ^{地名}ノ太子アルベルト名ヲ智トシテ以テ婚姻セント企
 ヲ布告セシキ國人太々安堵ノ思ヒラナシ大ニ是ヲ觀ベリ
 此婚ヲ結ヒシ後ハアルベルトノ盛名漸々四方へ雷鳴セリ



公自テ諸術ニ達セルカ故ニ是ヲ國民ニ教示スルノ權ヲ取
レリ又窮民ヲ惠メント欲シ第千八百五十年ニ自ニ費用
ヲ調シテ府中ニ在ル貧民救千ヲ任マシムルノ大室ヲ管メ
リ又千八百五十一年ノ博覧會ハ公ノ企ニ出タリ又千八百六
十二年ノ再度ノ博覧會ニハ公大ニ利益ヲ得タリ
女王ノ日記ヲ閱スルニ誓ヲ結ヒシ後ハ總テ幸福多カリシト
公在世中敢テ政事ノ一派ニモ係ラスト虽モ常ニ政府ニ
就テ女王ト國事ヲ謀レリ嗚呼公ノ死スル實ニ國家ノ為
ノ惜ムヘキノ機ニシテ女王ニ於テモ大ナル不幸ニシテ愁
傷亦云ヘカラス後女王薨ケトシテ不豫故ニ種々ノ流言

巷中ニ偏子シ然トイヘドモ近來ノ報告ニテ之ヲ見ルニ漸
ニ女王快氣ニ客殿ニ出テ客ヲ延見スルノ由ヲ知り大ニ歡
喜ノ思ヲナス是ニ基キテ萬葉前日ニ復スルヲ願フ如
ナリ
爰ニ於テ女王ノ功德ヲ贊美スルニ公ヲ以テ是ヲ賞セハ能ク
國王ノ任ニ當レリ又私ニ是ヲ賞セハ貞節ノ婦人ト云ベシ
故實アルベルトノ後嗣ハ當年廿七才ナリ此公モ亦
父ノ如ク才敏ヲ以テ天下ニ有名ナラシメテ願フ如ナリ此公
第千八百六十三年ニデ子ナルカ國王ノ女アレキサンドラ
娶レリ此女モ亦容兒美ニシテ生レ付秀才ナリ女王死去

ノ後ハ後嗣トナル可キノ賢女ナリト
方今太子アルフレットハガラテート云船ニテ日本并ニ支那
ハノ旅中ナル可シ余等當港ニテ太子ニ遭遇ス可キヲ恐
ル
當時全權公使ハルリーパークス海軍副總督ヘンリーケツ
ペルハ大坂ニ在留ナリ此時ニ當リテ軍艦尽ク當港ニ在
ラス女王ノ誕生日ニ當リテ責ノテ一隻ノ船アラハト思
フ併只女王ノ國民ニ慈悲マル難有ヲ想像スルナリ

神戸新聞

西洋第六月十日
我閏四月十九日

昨夕我壬四月十九日藝州侯小舟ニ乗リ外二艘ノ小舟
疑フラクハ或ト共ニ大坂ヨリ来リ居留地ヲ距ル一
小大名ナラン
五十間ノ処ニシテ行列ヲ整ヘ米國コンシユル館ニ
来レリ

先日中野シク當港所々ノ揚場へ運ヒ来レリ是ハ
定メニボントヲ造営スルノ用ナルベシ

大坂ヨリ出帆シタル多クノ軍艦ハ未タ北方ヨリ飯
サリキ
解曰洋人ヨリ官軍ヲ南方ト
唱ハ賊軍ヲ北方ト唱フ以下同之

先日疾ヲ受ケシフライナル者ハ次第ニ快氣ノ由ニ

併シ未タ傷ミハ強ク寒熱アルトナリ痲ヲ付シ日本
人ハ今ニ行衛知レズト雖モ捕人ノ者頻リニ探索ス
ル赴ニテ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚レト成レリ犯人ノコハ第
一ニ出セリ
横濱ヨリ左ノ新聞ヲ得タリ

江戸城ハ再ヒ北方ノ手ニ入りシト且又横濱新聞ニ
委シク記シタリシ先般東下アリシ勅使某モ既ニ害
セラル由又遠カラズシテ京都近傍ニ於テ再ヒ戦争起
ルベシ會兵ノ漸々ニ近ツクニ依テ豫メ備ヘヲセル趣
ニテハ斯クアラソクヲ信用セリ

ス子ラー船ナル小軍艦ハ第六月八日我岡四月
十七日大坂

ヨリ来リ昨夕出帆セリ

本月六日ノ後ハ價ヲ知ルベキ報告ヲ得ズ入港ノ品
物ハ價高キガ故ニ日本ノ商人嫌フテ買ハズ又出港
モノハ生糸ト茶ノミ商ヒアリ

或報告ニ依テ次ノ事件ヲ聞得タリ

過日英太子アルフレット名ヲ殺害セント謀リシオフ

一レル名ハ既ニ死刑ニ處セラレシト

アビツシニ一國ノ征伐モ既ニ終リ當時英兵凱陣

途上ナリ然ルニ生捕千余ヲ引卒スルニ就キ

變動ヲ生セシ歟未タ帰國セズ

或ル報告ヨリ尤ノ事件ヲ拔萃セリ

龍動^{名地} 第四月十五日バロック^名ノ諸ノ趣ニテハアビ

ニ^二國王和義^{ワボク}ヲ乞ヒシトモ又再ヒ復讐ノ兵ヲ起

ストノ信シガタキ風説アリ

第四月廿日ウオルス^名綱ノ英太子アルフレット夫婦共

ニドフリン^{名地}ニ到着アリシト

此前日太子ナイト^名館ノ官ニ任セシト

第四月廿二日英國トオーストリヤト通商ノ條約ヲ

取替セリヘニン人二人捕ヘラレシト是疑フラクハボ

キ^{名地}ニハム^名ノ宮室ヲ燒ントノ企ニ依テナルヘシ

神戸病院

第一卷ノ記ヨリ如ク病院の事ハ已ニ趣旨と立られ
たり乃ち左の如ク

病院購金録

神戸 外國事務役所 判

病院ハ人命と保助一人種と蕃培一貧民の病て医ホ
と得ざる者と救助を道あるハ國家ニ欠べりし
要務なり今茲ニ神戸ニ於て官許と請け一院と設け
貴賤の區別なく有病の者ハ来て治療と得しめ貧
民ニ医業と施し聊救助の一端とせんと欲す我

と志と同する者不問多少納金うらんを希望
せし者なり

病院御用掛

森 龍玄

辰四月

遠藤 謹助

前書に通りあるは若し有志の人ありは神戸運上所を
或ハ大坂北江戸堀一丁目會所神戸外國事務掛出張
所兵庫與陽之助方と持参す有との事なり

醍醐大納言殿有馬へ御出途之事

神戸警衛柳川侯の跡津山侯より警固なり

四月六日 関東風聞

一 徳川氏慶 四月十日水戸へ発途の由りて供方左之通

梅澤弥三郎

遊 撃 隊

精 銳 隊

此度被 仰渡候箇條の内城内住居の家臣廓外へ出
づき松 御沙汰ニ付此度参謀へ御聞合相成候如
全く曲輪中而已りて半藏御門より 櫻田馬場先和
田倉内平川御門を去るべき度なり 其余御構ひ
無之由

一 静寛院宮様天障院様の増上寺へ御開きの支と給り
其餘婦人方も右ふ準し申つきとの支なり
一 軍器引渡の支の目録と以て督府へ御渡しと相成し
品々ハ其終り成り有る由

一 北陸道より進み官軍ハ四月二日浅草東本願寺へ
操込又成りし知寺内手扱て滞留ありしとて同
六日同外西福寺へ引移り成りし趣なり

但し本願寺本陣の惣勢千二百人余と云

一 肥前の兵隊の糧米塩味噌十分の由なり

一 肥後の兵隊ハ四月三日白銀の邸へ着て惣勢凡五百

人程あり内三分の一ハ甲州路へ發行の趣且つ役々の
名前尤も記す

惣督 清水数馬 目附 財津源之丞

勘定奉行 浅井新九郎

勘定方頭取 才士弥一郎

勘定方 水谷才助 物書キ 大森吉之助

一 藤堂家人数五百人余乃ち尤も記す

惣師 藤堂仁右衛門 副師 藤堂隼人

謀師 藤堂監物 番頭者頭百廿人

司令炮手 三十九人 乗馬 七足

兵糧者頭 三百八十人 砲馬 四足

四月三日肥後勢八百人計リ千佳へ着内四百人計
へ士分_リて器械本込銃兵_リて兵勢壯ん_リ
と云其外藝州二百人若州四百人と聞也

水戸より奥州若松迄先觸馬

人足二百二十人 馬九疋

右ハ水戸殿家来市川三九衛門佐藤図書朝比奈弥
太郎等年来奸惡ノ所業有之今般依 朝命嚴罰
可申付候如多人数引連奥州會津筋へ脱走_リ赴相
聞候ニ付右為追捕水戸殿人数千二百人余罷越候

神戸新聞 西洋第六月十日
我周四月十九日

昨夕_我我_至四月十九日 藝州侯小舟ニ乗リ外二艘ノ小舟
疑_フ疑_ラクハ_或ト共ニ大坂ヨリ来リ居留地ヲ距_ルル_ハ九
小大名ナラン 五十間ノ処ニシテ行列ヲ整へ米國コンシユル館ニテ
来レリ

先日中野シク當港所々ノ揚場へ運ヒ来レリ是ハ
定_メニボントヲ造營スルノ用ナルベシ

大坂ヨリ出帆シタル多クノ軍艦ハ未タ北方ヨリ飯_ラ
サリキ 解_曰洋人ヨリ官軍ヲ南方ト
唱_ハ賊軍ヲ北方ト唱_フ以下同之
先日疾ヲ受ケシフライナル者ハ次第ニ快氣ノ由ニ

併ニ未タ傷ミハ強ク寒熱アルトナリ痲ヲ付シ日本
人ハ今ニ行衛知レズト雖^レ捕人ノ者頻リニ探索ス
ル赴^ニテ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚^レト成レリ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚^レト成レリ
横濱ヨリ左ノ新聞ヲ得タリ

江戸城ハ再ヒ北方ノ手ニ入りシト且又横濱新聞ニ
委シク記シタリシ先般東下アリシ勅使某モ既ニ害
セタル由又遠カラズシテ京都近傍ニ於テ再ヒ戦事起
ルベシ會兵ノ漸々ニ近ツクニ依テ豫^レ備ヘヲセル趣
ニテハ斯クアラ^ニテヲ信用セリ

ス子^ラ一^艘ナル小軍艦ハ第六月八日我岡四月十七日大坂

内膳敵の動靜と察し其後^ニを襲ひ一舉^ニて庄
内を取らん^ト兵隊を分り閑道^ヲを回^リ峻難^ヲをわ^く
て進^ミ知路^程遠く且ツ峻^カを^わが故^ニ行軍意^ニ任
セ^ル半途^ニ至^リ故庄内の陣^ニも其謀^ハ
畧^ト知^ル兵を割^リこれを迎^ムとせ^リ如^ク行^ハ
軍^ヲ築^ク外^ニと此策内膳^ガ計^ヲ如^ク行^ハ
其^ノ庄内を取^ル其^ノ易^キあり^トを
遺憾^ノ至^リと聞^ユ

一庄内の領地六万石計りの地ハ既ニ縮^ムと云^フ
又同領酒田と云^フ地ハ商人婦人等々何方^ニ行^ハ

一人も居らざると云つ

奥羽の戦争巷説區々々々々々人心騷擾をその
とも此新聞ハ秋田より告来る所ニ他日其後の報を
聞得ざる随て見ざる也一浮説盲談ニ惑の旗幟
恤く爰又贅を

北越の風聞

閏四月十一日薩州長州加州の監軍越後高田に至り
不審の事件を詰問及び一知陳謝粗相立ると云
先達て高田より出置る細作賊市川黨の爲生
捕られ信州越中辺の事と賊より尋ね故官軍追

々軍と纏めると答へて去らる其際小高田城と乘
取ると一と賊軍支度の騒々々々紛々彼の細作の縛
適と高田は歸ると敵の情態を報告と高田藩を
此注進を得る米山峠の要害賊を取られ取返
難一と軍議と決一同日夕を限る小兵隊と操出を
薩長兩藩の兵も越中岩海浦より乗船して越後今
町に上陸し米山峠へ應援の手筈をとりとぞ
新瀉と賊を取らるとの難義をうると薩長肥前等の
軍鑑同所へ進發と云きの令あり一由なり

因て今日高田城の北辺に在りて越中富山より

船路卅里と云又米山峠ハ越後頸城郡刈羽部の境ニ
一ノ高田の東北長岡共板への半途よりて柏崎の
南方又當ると云々

櫻雲主人曰近來外國人ヨリ種々ノ珍説新聞
ヲ神戸長崎横濱函館ノ間ニ傳觸スルハ畢竟臨
時ニ罟械貨物ヲ賣沽シテ此舉ニ乘シ大利ヲ
射ランフヲ喝希シテ然ルナリ右ノ件々ノ説モ
信ズルニ足ラズト雖モ今茲ニ出セルハ尚此上ニモ妄
説狂言ヲ諸方ヨリ拾ヒ集メ取捨斟酌シテ讀者
ノ為メニ知見ヲ開カント欲ス識者幸ニ了解セヨ